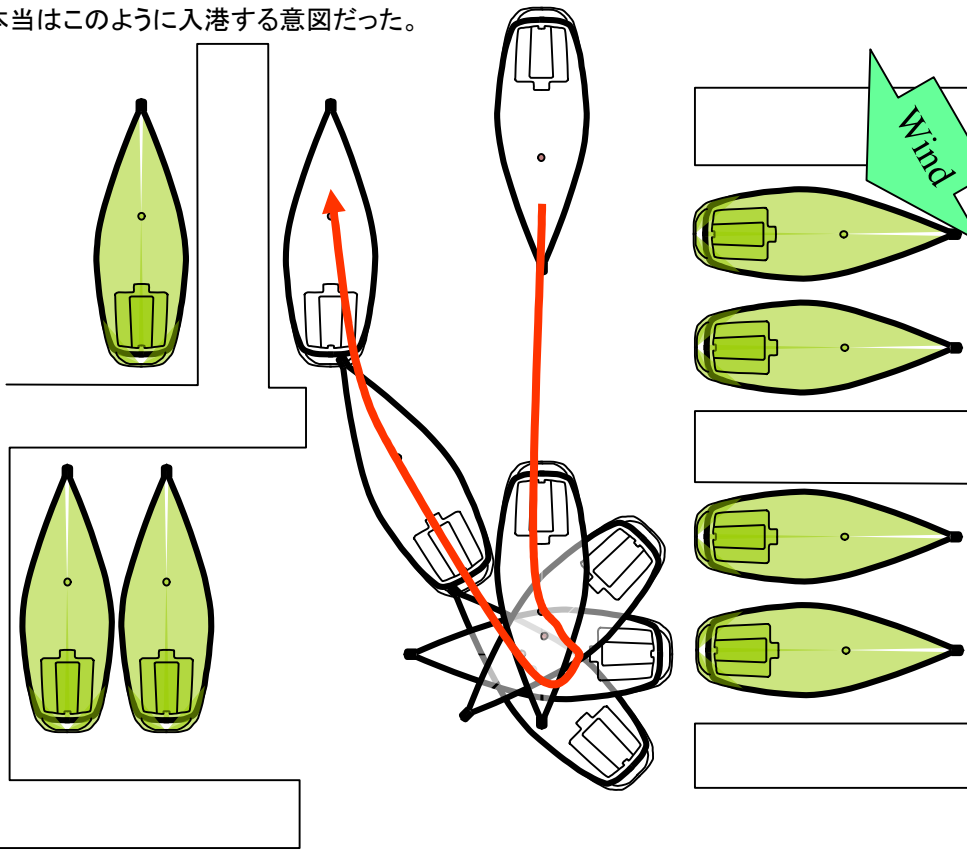


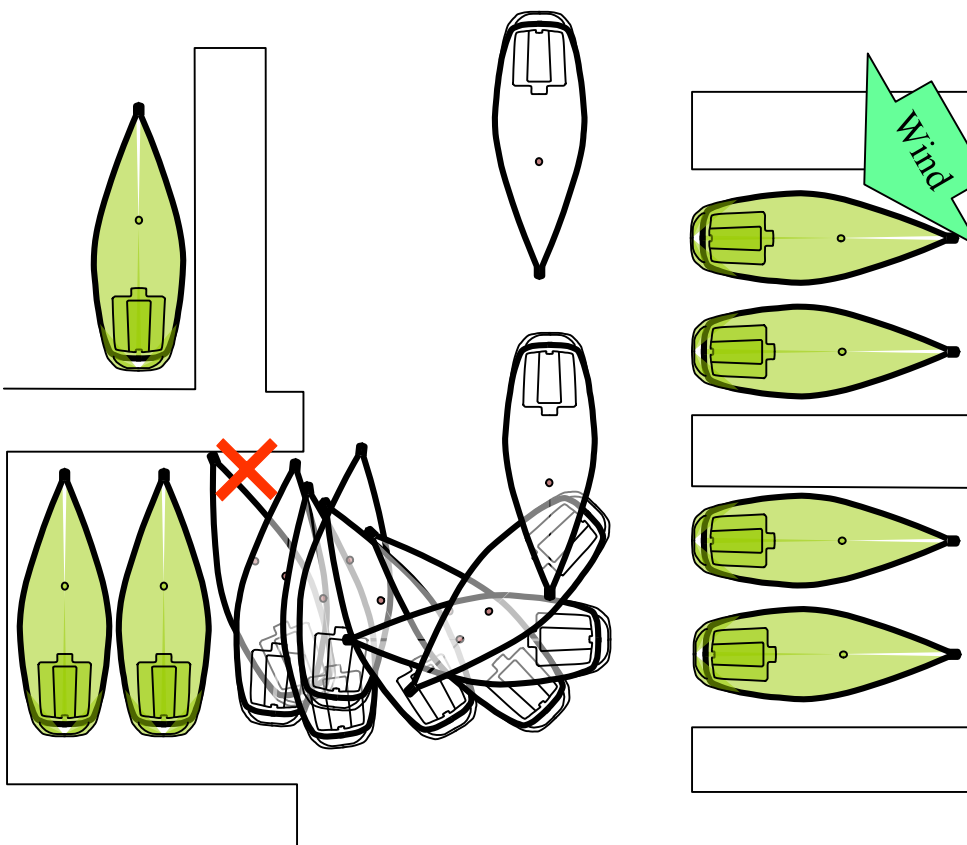
入港計画

本当はこのように入港する意図だった。



港内の奥まで進入して、プロップウォークによりその場回頭を行い、その後に接岸予定のバースへ進むこととしていた。

実際に陥った状況



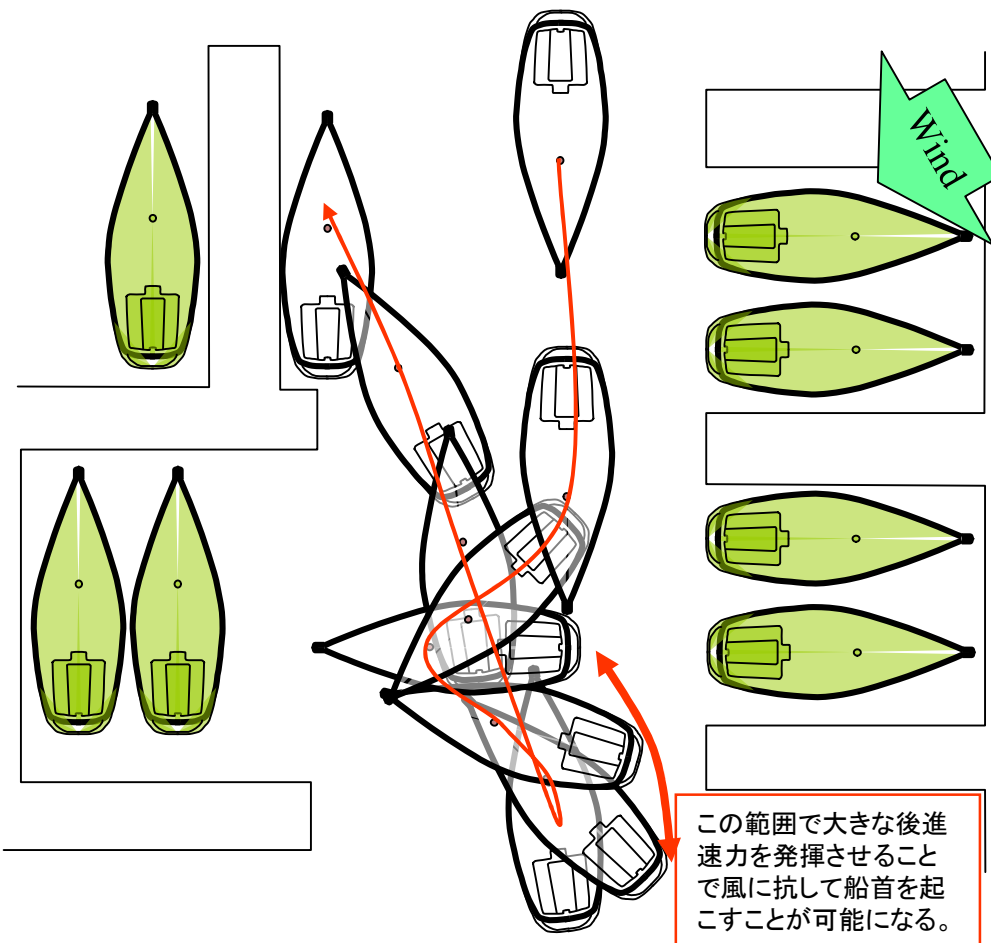
入港作業における操船でプロップウォークを企図したが、風が「その場回頭」の効果を抑え込む方向に作用した。

このときのヘルムスマンは経験不足のため、周囲の停泊船や施設との距離を気にするあまり、機械の使用が極めて消極的になってしまった。

従って、有効な手段を講じることができないまま風下へ圧流されて操船余地を失ってしまい、予定外の場所へ危険な状態で進入する結果に至ってしまった。

これは、外力に対する考察の不足と機械・舵の使用の不適切により陥った例である。

状況にあわせた入港操船胸算



この状況での入港操船では、風が不具合の方向に作用する。従って、プロップウォークの段階で、大胆な機械の使用が必要となる。先の失敗の原因は、周囲にある施設や停泊船に近づくことを警戒しすぎたためである。

大きな後進の行き脚で何かに接近するというのは不安であることは理解できるが、少々大きな後進の行き脚で何かに接近する場合でも、前進ギアに切り替えて適切にショートバーストを使用することで十分に回避できる。

また、後進の行き脚が大きいと舵の効きも有効になる。さらに、前進のギアでもショートバーストにより船首を強く回頭させることができる。

この範囲で大きな後進速度を発揮させることで風に抗して船首を起こすことが可能になる。

機械のショートバースト使用により、風下へ圧流されて操船余地を失う前に、その場回頭を完了させて、最終アプローチのコースに船を載せることができる。